

卷之三

卷之三

序にあたてて

1. 我々はなぜ全學斗を結成したのか?
—全學斗とは何か?—

1.10.17三公示廃止発表の本質は何か?

！何を獲得していくのか？

斗争方針

全ての学友は全学年一緒に集めさせよ！

法學部斗争委員會、文學部斗争委員會、哲學部斗争委員會、清學部斗争委員會、經學部斗争委員會、理工學部斗争委員會。

昭和43年10月21日

全學斗争委員會發行

自己目的化されし物取り主義、繁殖としてしまつてゐる。斗の調査をそんじて人間の創意的侧面であり、生き方、の藝術が遺してある。『被縛れ、殺されば至てが死する』ではなく、『殺さざる自然が活動をいかに内実あるものとするか』がこの斗にして開かれたりるのである。

このよつと其本體、體認たうされければ、眞實的有得自體と次の如く認定する。

1) うなぎを確認する中で、やれやれの斗争方針を

生き生きとした運動の実現の前提であり、実体化の道

方の本音である。これが、隠されれば、全てが成るのではなく、隠さざる本音を活動にいかに利用するものとなるのが、牛の斗争として開かれているのである。

このような基本的構造は、われわれは、具体的な獲得目標を次の如く認定する。

（経済の自由）「表現の自由」、「言論の自由」を実現するためには、三公本末制の外にもめたつて、農業生産性化して行く。この集会は、一般的無媒介的・断続的に構成されるのではなく、開拓した結果を論理的である。二のことなくして、牛には実質的なものはなりえない。

諸君に對する本校の確立 一切の豫定を了
等々、これがほん實的には、人間としての創造的
方の眞なる發揮の表現以外の何物でもない。
全ての勇氣ある兄弟姊妹！
斗りに起て！
至学斗に結集せよ！

斗争方針

斗^リに対する我々の基本的主張は、一般的に「民主化」をめざすことではなく、現在の大官行政の根本的な改革を実現したことである。この斗^リとして自由の剣にな鞭撻を加え、いかねばならない。すなむち、大官の全人の命の立場の確立であり、具体的には、大学の教養をもつて卒業しなくてはならないことである。そのうえ、あらゆる意識に対する斗^リとして、全般的に創造的斗争を展開することである。要は、この斗^リが一般的規範的立場の斗^リではなく、われわれの人間としての創造的、生き方のカタツメの追求が目的に企圖化していける斗^リとして、内面の身体的斗争として展開することである。二のよう本意を失わなければ、斗^リは、その人間的尺度を失しない。本質から全ての現象の身体を把握していくのである。現象から現象をみようとするよりは、現象的な努力に終止することになるのである。われわれは人間を生むければならぬ、人間の思考を生むなければならない。

共闘の問題については、専門院組織と連携する形で体制の確立はありえないなどということを確認する。専門院組織が組織的支持することはかまわないが、既成組織が組織的に専門院に参加するのは、一人の人都としてであり、既成の組織に専門院に参加して、その人間は一人の人間の個人と認識されなければならない。よって、われわれは既成組織との共闘はありえないことを確認する。一人の人都として具体的に参加することこそ基本だと想うが。

専門院は、直接民主主義的の環境にたどりこむことで専門院化されなければならない。われわれは、本物の専門的討論の実現だ。グルーピング討論の徹底化として実現する。その中で、クラス討論・個別討論・専門討論・全体会議を実体化して、一人のである専門教育の講義の形にはさずふうな不斷のクラス討論と融合していく。つまりは、一方向的なアピテーションの場にしちゃならぬ、生き生きとした集会として実現がされね。

あらゆる討論の徹底化こそが、

金澤先生の参考は、自主的参加を原則とする。例え
ては審査会などにいっては認めない。一人の個人的
人間であることを個人の面として、自己の個人として
の創造的な生き方ニの力で得た追求のために具体的に
せずからうの事件のものに、せんからうの思考行動を実現
しようとする動きをばねでもか参加できるのであ
る。金澤先生は、その講演に対し、批評することを
封じたりはしない。完全な討論をあくまで志を抱くする。
ゆれゆれは、南雲先生と義理親類す。
直接民主主義は、制度でも、ルールでもない、それ
は、運動の展開の中には必ずや運営してくるものであ
り、全ての朋友の一人一人が、自分の責任のものと
思ふ行動を実現し、一人一人自ら加計りの主体とな
ることがざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざ
二枚の手帳が、わざわざ手札の眞体あるものと
して、見えてくるのである。

スローガン
一〇・七欺瞞的公示彈劾

一、三公示体制の再編強化粉碎

二、自治会設立を勝ち取る

三、教育の帝国主義的再編

一、全ての学友は全学斗へ
緒集せよ

二ことを確信する
生の朋友は当局の中傷と譲るには何のけ全然

昭和四年十月二十一日
青学大塙字斗争委員会